

馬喰八十八伝

ばくろう

やそはち

でん

井上ひさし



馬喰八十八伝井上ひさし

ばくろう

やそは



馬喰八十八伝

一九八六年四月一日第一刷発行

著者 井上ひさし

発行者 川口信行

発行所 朝日新聞社

●104 東京都中央区築地五―三―二
電話 ○三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

印刷所 共同印刷株式会社

定価 一二〇〇円

目次

本編の主人公が八十八と
名乗る以前のこと

7

われらが主人公八十八に
御難さわぎがつづくこと

41

われらが主人公八十八が
第二第三の大嘘をつくこと

77

われらが主人公八十八の命が
風前の灯となること

113

われらが主人公八十八が次々に
難局を乗り切ること　そしてロマンス

147

われらが主人公八十八が
嘘についての若干の思索を試みることに

192

われらが主人公八十八が
高野村百姓衆と肝胆相照らす間柄となることに

234

われらが主人公八十八が
新たな強敵と相見えることに

269

われらが主人公八十八がついに
桜の殿様と事を構えるに至ることに

305

われらが主人公八十八がたった
ひとつの嘘がつけずに悩むことに

340

装丁 山藤章二

馬喰八十八伝

本編の主人公が八十八と 名乗る以前のこと

一

下総国しもとうのくに（今の千葉県北部と茨城県南部）の、馬産地として知られた桜七牧さくらななまきのひとつに、高野たかのという石高いさか五百五十六石九斗三合五勺の村があったが、この高野村の真北にある眺峠ながとうげへ、九州天草一揆いっきが鎮まっていた間もないさる年の雪消え時の夕暮れ、ひとりの若者がひよろひよるの瘦馬やせうまをひいてやってきた。若者の年恰好は十七か八、血色のいい、金時のような丸顔に、はしこそうな大きな目のはまっており、太い眉毛は八の字にさがってなかなか愛嬌があった。若者の呼び名は今朝次けさじだったとも、また乙次おとしだったともいわれるが、たしかなことはわからない。はつきりしているのは、この眺峠へさしかかったときは、すくなくともまだ八十八やそはちとは名乗っていなかったということだけである。

「ここより高野村」と刻まれた石の道しるべに片足をのせて目の前にひろがる村のたたずまいを生き活きた目付きで眺めおろしている若者にくらべると、瘦馬には元気がなかった。下総国には高い山などひとつもない。この眺峠にしているのがはばかられるほどの、いわば台地の鞍部にす

ぎず、海拔五百尺（約百五十米）あるかなしかだろう。しかもその日はまだ五里とは歩いていないのに、瘦馬の鼻息はごうごうとまるで鍛冶屋の土間のフィゴのようである。よく見れば体格は堂々としており、並みの馬でないことがわかるが、いまは肉がげっそり削げ落ちてゐる上に傷だらけ、おまけにいたるところに剝げがあつて、氣の毒になるぐらい塩垂れて見えた。とりわけ見苦しいのは前歯である。漬けすぎの沢庵よろしく汚い飴色に染めあがつてゐるのはまだいいとして、前歯が口の外へ傾いて伸び、常に剝き出しになつてゐる。こういう歯では穀物や乾草をよく噛むことはできないだろう。そしてよく噛めないから歯が磨り減らずにいっそう無様に伸びる。この悪い堂々めぐりは馬が老いぼれてゐる証拠である。ところでこの瘦馬の名前を「花雲」という。主人公の名前がわからないのに、馬の名前はちゃんと伝えられてゐるというのは考えてみれば奇妙な話だが、しかしそれはわれわれのこの物語にとつてたいした不都合があるとは思われない。どうせ間もなく花雲は死馬となるのだし、若者はやがて新しい名前を見つけるはずだからである。

もうひとつ、馬喰八十八という大法螺吹きの子を後世に伝えたこの高野村は、田や畑、山林や川にも恵まれて、七百余人の村人たちは米、粟、大根、炭、川魚などにそう不自由はしていなかったけれども、その暮しの五、六割方は馬で支えられていた。たいていの百姓が馬を二、三頭飼つていて、仔馬を生ませては立派な若駒に育てあげ、三月なかば、半月間にわたつて代官所近くの空地で開かれる馬市に出して売り、それで得た金で着るものなどを手に入れる。馬のおかげで暮し向きは豊かであつた。もつというとは馬は神様のようなものだ。村の守護神を生馬神社といい、保馬神という厩の神様を御本体としてゐるところからも、村人が馬をどうみているかわかるだろう。こういう里では、馬の名前の方がその主人の名前よりも大事なのである。

花雲という瘦馬は、頸の付根に振り分けにして袋と鍋とをさげている。頸の付根のことを正しくは

「背峰^{せみね}」といい、それから後へ「背」、「腰角^{こしかど}」とつづき、「尻」、「尾」で終るのだが、これは物語であつても、馬学の専門書ではない。これからは正確な名称などにはこだわらないことにしよう。袋の中味は米で、袋のふくれ具合からみると三升ぐらいは入つていそうだ。

「ここから一里ぐらいは、だらだら下りの山道だ。道の両側^{しうがわ}は椎の木と栗の木だな。林がつきると畑で、畑の次が田んぼか。畑や田の土おこしをしているのは、みんな馬だ。こいつはいいぞ、よろこべ花雲、いい種付け^{たねつけ}口がありそうだぞ」

若者は瘦馬の肩先をびたびたと軽く叩いた。種付け口と聞いて花雲はいつそう前歯を剝いてうれしそうな表情になり、後足の片方で土を掻く。花雲は牡馬^{おす}で、図抜けた種付けの技倆を持っていた。どんなに気性の荒い、癩癖^{らへく}の強い牝馬^{めす}でも、花雲がうしろに回ると、たちまちでれでれのでれんとなつてしまうのである。あとは花雲の一人舞台だった。しかも一日に牝馬二頭は平気でこなすのだからたいたしたものだ。ここでぜひいっておかなくてはならないが、花雲のぶらさがりものはとても長くて牝馬の奥の奥まで届くので種付けにしくじることはまず稀だった。種付け料の相場は米で一斗である。若者はその種付け料で口に糊^かをしながら諸国を旅して歩き、各地の国分寺や有名な神社やお寺をたずねて回っているのだった。

「田んぼの向うに西から東へ茶色の紐^{ひも}みたいなのが走っている。たぶんあれが成田脇街道だろう。街道に沿って町屋が並んでいる。なかなか景氣のよさそうな町屋だな」

夕餉^{ゆうけ}を炊^かぐ煙が町屋の上に低くたなびいていた。若者は方々を歩いているうちに、竈^{かまど}からのぼる炊事の煙で、その町屋の景氣を計ることができるようになっていた。煙の濃い薄いで一汁一菜の村か、一汁二菜の村かわかるのだ。町屋をいま包む紫色の雲は、どうみても一汁二菜である。若者はさらに目をあげて遠くを見る。

「街道と並んで大きな川が流れているな」

その川の向うに、紫雲の上にふかりと浮ぶように三層の天守閣が見えた。右方、すなわち西からの入目を浴びて天守閣は金色に輝いていた。

「川向うが桜の御城下か」

若者がうなずいたとき、瘦馬の背の上で檻棲ぼりの塊のようなものがごそごそと動いた。花雲が自分の背中にこしらえた巨きなおできとも見えたその塊は、よくよく目を凝すと人間である。

「腹が減ったぞ」

萎しなび胡瓜きゅうりに風呂敷をかぶせたような老婆である。

「はやく飯が喰いたい」

「おっかさま、間もなく町屋だよ。川も近いし、川魚がたべられそうだよ」

老婆は若者の母親だった。死ぬ前に百以上の神社やお寺におまいりしたいと発願して、北国の村を発ったのが三年前の正月のことである。つまり国分寺や有名な神社やお寺をたずね歩いているのは若者の趣味ではなくて、母親の悲願なのだった。

「すぐ下の村で種付け口にもありつけると思うよ。そうしたら成田山へもおまいりに行ける」

「成田山で、八十八カ所にまいったことになるのう。あと十三カ所で大願成就の百カ所まいりじや。」
今年の暮には故郷へ帰れるかもしれん」

「たぶんな」

老婆にそう答えてから、若者は花雲に向っていった。

「ツロー、ツロー、ホワー、ホワー」

花雲は前へ歩き出したが、その足取りはえらく慎重だった。落日にあわせて道が凍りはじめている

が、花雲の跡は、真上から印でも捺すようにしっかりと地面を捉えて行く。滑らぬ用心をしているのだ。「止ッ、止ッ（歩け歩け）」、「動ッ、動ッ（止まれ止まれ）」ぐらいいしかござんじない方に「ツロー、ツロー」や「ホワー、ホワー」は奇異に聞えたかもしれないが、これにも意味はある。「ツロー、ツロー」とは「前へ進め」で「ホワー、ホワー」は「滑るぞ、用心せよ」という馬語だ。ほかにも若者は花雲との間に次のようなことばを共有している。

ヨホ、ヨホ
こっちへ来い

ウオー、ウオー
右へ回れ

ユエー、ユエー
左へ回れ

スオ、スオ
後へさがれ

コロロン、コロロン
坂道注意

トイル、トイル
足を揚げろ

ピリッ、ピリッ
急げ

ケー、ケー
たべろ

アホ、アホ
ばか

ハイ、ハイ
その調子

テテホ、テテホ
ここで待ってろ

ヨシ、ヨシ
ご苦労であつた

これに声の高低、強弱など、口調がひとつにつき十以上もあるから、それだけでも百五十種のことばになる。そして百五十種を組み合せれば数千の言い方が可能になる。そこで若者は花雲をどのようにも操ることができるのである。

林がつきて道が畑に入るあたりで入相いりあひの鐘が野面のづらをわたってきた。道に近い畑にまだ土おこしには
げんでいる百姓がいたので、若者は花雲をとめて、

「その土おこしをしている牝馬ですが、いい仔馬を生みそうな腰をしていますね」

と声をかけた。百姓は顔をあげて若者を見、それから花雲へ目を移して、けけけと耳ざわりな笑い
声をあげた。

「馬をほめられたんだから、ほめかえすのが作法だが、しかしなんだい、その馬は。それでも馬かね」
「ここ数日、町屋の馬喰宿に逗留しています。種付けの御用があつたら遠慮なくいつけてください」
こうやって出来るだけ大勢に声をかけておくのがコツだった。百人に声をかけておき、そのうちの
ひとりでもいい、種付けを頼みにきてくれればこつちのものなのだ。そのときの花雲の動き、ぶらさ
がりものの捌き方、それを一目見れば、だれだつて花雲がそのへんの種馬とはくらべるも愚かなほど
の逸物だと気付くだろう。あとは口から口へと伝わって、二、三カ月分の食扶持ぐらいまたたく間だ。

「そのほか、馬の血取りもします。蹄も削ります」

馬には余分な血がある。そこで四季ごとに馬の顎あご、額ひたい、蹄際つみぎは、背筋、尾骶びてい、腿ももの根などに馬さし針
を立てて血を抜く必要があつた。若者はその馬さし針の扱いに自信がある。

「種付け賃は米一斗です」

「それは安いな。だがね、そんな老いばれにいったい種が出るのかね」

「びゅうびゅうと出します。鹽あらいに**いっばい**の糊のりをぶちまけたみたいに」

「その馬は何歳になるのだい」

「おれが生れる前から家にいました。おれが物心ついたとき、おっかさまが『この花雲は二十五歳だ』
といっていた。ということは四十歳以上かな」

「な、なんだと」

百姓は馬と犂^{すき}とを放り出して道まで出てきた。馬の一歳は人間の三歳に相当する。ということは、四十歳馬は百二十歳の老人と同じぐらい珍しい。百姓が仰天したのも無理はなかった。

「種は濃いんですよ。なんならここでも出させてみましょうか。それを見てから決めてくださってもいい。この花雲の種だから、きっと丈夫な仔馬が生れますよ。もちろん、たしかに種が付いたとわかるまで、おれはどこにも行きません。この高野村に逗留しています」

「ここらあたりの種付け賃の相場は一斗八升だよ。それから見たらずんと安い……。やめた、やめた」

百姓は若者の後方へちらつと目をやると、急に怯^{おび}えて犂のそばへ駆け戻ってしまった。背後からカッカカッと蹄の音が近づいてくる。振り返ると、錦織りの、ぴかぴかの、袖なし羽織を着た三十前後の男が、そっくり返って手綱をとって、こっちへやってくるころだった。男のうしろには栗林がある。そして栗林の梢越しに夕焼けを映して赤々と燃える瓦屋根が見えた。栗林よりも高い屋根など滅多にお目にかかれるものではない。よほどの長者が住んでいるにちがいがなかった。錦の羽織のこの男がその長者なのだろうか。

「弥助、おまえのところに馬にそろそろ種を付けてやろうな」

錦の羽織の男は畑の百姓へ野太い声でいった。

「へえ、駒太夫様、お願いもうします」

百姓は犂を担^{かか}ぎ、馬を追って逃げるように去った。

「せっかく話がまとまりかけたのに。惜しいことをしたな」

ぼやきながら口輪を掴み直した若者へ駒太夫と呼ばれた男が馬を寄せてきた。鬼瓦のような顔をし

ていた。細い目が狡^{ずる}そうに光っている。

「まとまりかけた話というのは種付けのことか」

「はい」

「この高野ノ牧^{まき}で種付けをしてはいかん」

「それはこまります。おれたち、干乾しになってしましますよ」

「では、干乾しになっちまうがいい。いいか、若造、この高野牧は桜家の御馬^{おんま}見代官長島茂兵衛様が治めておいでになる。その長島様の手足となつて、馬のこと一切を取り仕切り、取り捌いているのが、この駒太夫様だ。種付け、血取り、馬市、競馬、御野馬^{おのま}捕え、なにもかもこの駒太夫が差配(管理)しておる。このまま出て行け、といつてはあまり可哀想だ。一晚だけ逗留を許してやろう」

「仕事がしたいんだ。もうすこしここへおいといてください」

「老いぼれてはいるが、なかなかいい種馬だな」

さすがに馬のことには詳しいらしく、駒太夫は一目で花雲の能力^{ちから}を見抜いた。

「その馬をこの駒太夫に進上する気はないか。そのかわり一生、高野牧に居させてやるが、どうだ。三日後に御野馬捕えがはじまる。村の東北に、柴垣や柵でこわれた南北二十六町、東西十五町の御牧^{まき}があつてな、そこには御公儀^{お公み}の御野馬が百數十頭も放し飼いにされている。つまり桜家が面倒をみているわけだな。その御野馬を捕えるには、百人からの勢子^{せこ}が要るが、おまえを勢子のひとりに雇い上げてやつてもいいんだぞ。御野馬捕えがすむと、馬市だ。これにも人手^{ひと}が要る。おまえを使ってやろう。ただし、その馬をこの駒太夫に進呈してくれたら、だがね」

「明日の朝、出て行きますよ」

「ようし、きつとだぞ。午^{ひる}近くになつてもまだうろろしているようなら、そのときはただではおか